

講演II

東北の歴史と貧困

蟻塚 亮二

1. 東北の貧しさと戊辰戦争

古代から東北は「みちのく」(道の奥)と呼ばれ、中央政府に従わない野蛮で劣った人々の住む土地だと考えられていた。

近代になり、統一国家を目指す官軍が東北に攻め入った時、東北の各藩は官軍に抵抗して闘った。このため明治政府は東北の人々に対して報復的な政策をとった。明治政府は東北各県の国有林比率を高く設定し、農家の耕す農地が不足して農家収入が少なくなり、東北の貧困は加速された。

日本が近代化を図る一方、東北は日本の産業革命からおいていかれた。そして食糧や労働力や兵士、鉱山資源や林業資源や電力の供給など、国家近代化に必要な資源の供給基地となった。

また東北から多くの人々が北海道と海外に移民した。現在も海外移民の都道府県別人数、沖縄県がトップであり、福島県は全国で7番目と一番多い。

1930年代に東北は深刻な冷害と世界恐慌に襲われ、多くの人々が満蒙開拓団に参加した。満蒙開拓とは、満州人がすでに耕していた土地を買い叩き、朝鮮人や満州人を小作として雇って営農した。

2. 国策難民：満蒙開拓・ブラジル移民・戦後開拓・原発事故避難

敗戦の時、外地には660万人の日本人がおり、国内には元兵士や空襲被害者など失業者があふれ食糧難が深刻だった。このような余剰人口を困い込むために国は戦後開拓計画を作り、既存の農家が農耕不適と見放した山林や荒野に誘導した。これは一時的に農村に人口を預け、必要に応じてそれを取り崩して戦後の工業化に使用していく「人口の一時プール」だった。

福島県の戦後開拓においては、浜通りや県南に入植した人が多かった。葛尾村は農家戸数の50.4%が戦後開拓であり、以下飯舘村、浪江町、大熊町、双葉町、相馬市と続く。浜通りに多いのは「耕作困難地が多い」ためだった。

やがて原発事故がおこり、故郷→満州→浜通り→原発事故避難と何回も移住を余儀なくされた。

これは国内難民(IDP; Internally Displaced People)である。敗戦時に大陸に棄てられた満蒙開拓団も戦後開拓もブラジル移民も原発事故避難者も難民(IDP)である。難民という枠組みでとらえることにより、欧米で盛んな「移民・難民のメンタルヘルス」研究と原発事故避難者との国際比較が可能となる。

3. 戦後開拓の土地に原発が出来た

戦後開拓の土地は、「耕作限界値であり僻地であるゆえ人口密度が少ない、海岸地帯で平坦な痩せ地が既に人力で開墾されている。しかも他の土地と較べて格段に安いという条件が原発立

地に適していた」ために全国で原発が建てられた(飯田市歴史研究所年報、2018)。

主なものは、福島県浜通り、茨城県東海村、核燃料サイクル基地の青森県六ヶ所村、青森県大間原発、愛媛県伊方原発、福井県大飯原発、佐賀県の玄海原発など。

4. 原発事故による精神的影響

原発事故によって帰還困難地区となった福島県浪江町津島地区の住民 500 人を対象に、PTSD と精神的不調について調査した (2019.3)。その結果、48.4%の人が PTSD に苦しんでいた。これは日本の過去の災害の中で類を見ない高さである。

ちなみに阪神淡路大震災では PTSD は 10.9% (辻内)、中越地震で2年後に仮設住宅にいる人で 40.1%だった (新潟県こころのケアセンター、2008)。沖縄戦体験高齢者 400 人調査(2012)では PTSD は 39.3%だったので、原発事故避難者の PTSD は戦争並みに高い。

また「重症の精神不調の者」(K6 テストにおいて 13 点以上)は、県内避難者で 26.6%、県外避難者は 43.2%にのぼった。県外避難者の 4 割強が重度の精神不調にあるのは言葉も文化も異なり、経済的な困難を抱えて県外に避難することがいかに苛酷な体験であるかを示している。おそらく今も全国に避難している 3 万人余の人々の健康も、同様に深刻な状態にあると思われる。

5. 震災後に被災者が遭遇した困難：慢性的社会的虐待

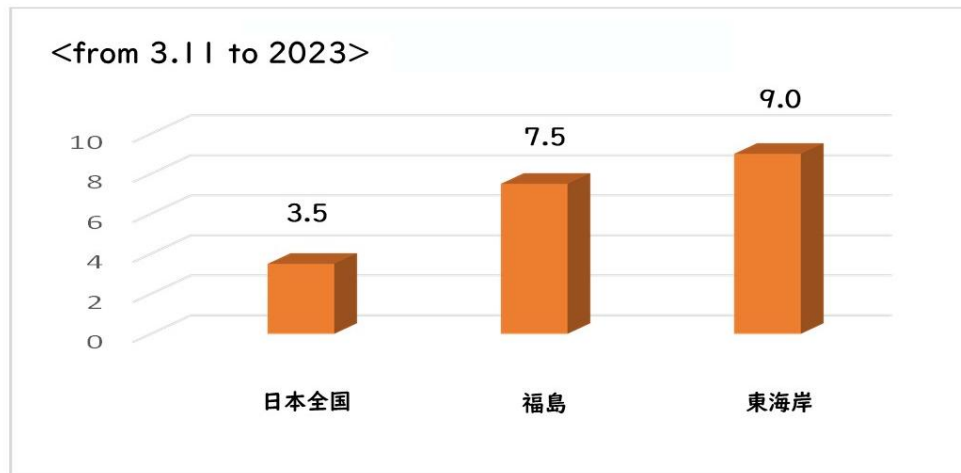
原発事故で福島県真内陸部に避難している女性は、原発再稼働の報道に、「怒りを乗り越えて心が折れた」という。少ないお金をやりくりして避難先で生きてきた。そんな避難先での苦労や自分たちが生きた価値を原発再稼働のニュースは全否定するからだ。

外来通院する高齢女性患者さんは、「震災も大変だったけれど、震災の後に生きてくるのがもっと大変だった」と言った。どうしてか？ 震災を契機として自分の人生設計が変わってしまったからだという。

大震災と原発事故が起きるまで、人々は平和な日々がずっと続くと信じていた。だから自分たちの未来計画では、「あと 10 年したら息子が結婚して嫁さんをもらって孫に会えるかもしれない」などと思っていた。しかし原発事故を契機に若者たちがいなくなり、さらに高齢化なども加わり、この地域の人たちは未来の計画が描けない。そこに原発汚染水の海洋投棄のニュースを聞いて、この地域の人たちの心は折れてしまう。被災地における、このような未来喪失的な事態は、慢性の社会的虐待である。

震災以降、児童虐待の相談件数が全国平均で 3.5 倍に増えたのに対して、福島県で 7.7 倍と全国の 2 倍を超えた。原発のある福島県浜通り地方では 9 倍に増えた (読売新聞、2023.3.17)。

福島東海岸で児童虐待が急増 (読売新聞 2023.3.17)



教育関係者によると、中学から高校、高校から大学への進学に際して、子どもたちが早々とあきらめる傾向が目立つという。もう一頑張りすれば成績が伸びるのに「早々とあきらめて志望高校のランクを下げる」子どもたちが増えている。また偏差値の高い大学へ進学を目指す高校生が震災前よりも少なくなった。進学だけが生きる意欲の指標ではないが、子どもや親たちが挑戦的で刺激的な未来を回避する傾向が強くなっている。

10年後、20年後の子どもたちに、うつ病や自殺、PTSDや家庭崩壊、アルコール依存等が多発しないか心配している。

被災地では大人も子どもも確かな未来がなくなってしまった。最近、度重なる地震による建物の修理に加え、今も週2回に出漁が規制される漁業、さらに原発汚染水の海洋投棄と続き、「心が折れた」と地元の店主はいう。患者の一人は、福島原発地帯はあと100年たっても復興しないだろうという。私もそう思う。放射能被害は、この土地を100年単位で苦しめると思う。

6. 被災地でみるトラウマ

私たちの診療所は、気が付いたら震災や原発事故、虐待や不登校、セクハラやパワハラ、ヤングケアラーや性暴力被害など、トラウマに苦しむ方たちでいっぱいになっていた。彼らがこれまでたどってきたのは、「生きる」と死ぬとの「スレスレ」の道だった。「もうこれ以上ない絶望」の縁を歩いて私たちの診療所に来られた。私は、彼らがここまで歩いてこられた奇跡に感嘆し、リスペクトし、時には診察室でハイタッチしあう。

ヤングケアラーだった兄と妹が教えてくれた。母親はアルコール性の肝硬変で寝込んでいて、しかし酒におぼれ、義父も一緒になって飲酒。兄妹は学校に行かないで家族全員の家事をこなす、母の介護をしてきた。幼い時から母親の離婚・再婚により転々とし、母の4度目の再婚で福島にきた。

中学生の頃から母の介護や買い物、炊事、洗濯に明け暮れ学校に行けなかった。未来の夢や希望などは彼らの頭になく自分たちと無縁な言葉だった。いつも自分を責めていた。何度も自殺を図ったが、その都度ただ苦しく涙だけが流れた。

母が亡くなり、やっと解放され、「この世には死ぬこと以外の別の選択があるかも知れない」と思った。そして当院にたどりついた。診察後に受け取った薬を飲んで「こんなに眠れた」ことに感動したという。

このような「死ぬ」と生きるとの「スレスレ」を歩いてこられた人たちに感動することにより、私は「支えられている」と思う。実は私が「生きる勇気」を与えられている。

「絶望と希望が紙一重の時代」に、「歩く人が多くなればそれが道になるのだ」と鲁迅は言った。私たちの今もそんな困難な時代だ。

生きることが幸せだなんて嘘だ。生きることは傷つくことだ。私たちが歩く先に希望があるかもしれないし、ないかもしれない。生きる希望があるとしたら、トラウマだらけの灰の中にある。

7. 沖縄戦と戦後のトラウマが、沖縄社会に内在する文化的トラウマとなった

沖縄にいた時、2010年12月、私は子どもの頃の沖縄戦の体験が、60余年の後に発症する心的外傷後ストレス障害（PTSD）を見つけた。

沖縄戦によるトラウマ・ストレス症状を次のようなものがある。

晩発性PTSD/命日反応型うつ状態/匂いの記憶のフラッシュバック/パニック発作/身体表現性障害/戦争記憶の世代間伝達/破局体験後の持続的人格変化/認知症に現れる戦争記憶/トラウマ体験による幻視・幻聴

この他に、うつ病や統合失調症、DV、アルコール依存、自殺、児童虐待、離婚、引きこもり、暴力、家族不和、養育ネグレクトや就労能力の喪失、不潔、過喫、大量飲酒、などが発生したものと考えられる。

上間陽子の『裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち』に描かれた少女たちは、家庭に居場所

がなく、キャバクラで現金収入を得ながら男たちの暴力から逃げる。

この有様は、沖縄戦のトラウマが沖縄社会に消し去り難い苦悩を与え、それが構成員のアイデンティティに色濃く影響したものと考えられる。つまり**沖縄戦のトラウマは、文化的トラウマとして沖縄社会に内在されるに至ったことの証左に他ならない。**

8. 巨大なトラウマの後には巨大なメンタルな不全が現れる

沖縄では、戦後18年たった年に強姦、強盗、殺人、放火などの凶悪な少年事件が4865件も発生し「戦後最悪の少年非行の年」と呼ばれた。

巨大なトラウマのあとにはPTSDやうつ病、パニック障害、精神病、アルコール依存症や非行、犯罪などの発生がしばしばみられる。

福島県の子どもの心に「何か」が起きている。その「何か」は、子どもたちの将来生活に困難をきたすであろうことは容易に想像される。

例えば児童虐待の数は、原発事故後に全国平均(3.5倍)をはるかに凌駕して急増した(9倍)。児童期に虐待などの逆境体験を強いられた子どもたちは、自己肯定感を低下させ、学業不振や対人関係困難などを招来する。

この結果、彼らの多くが成長してオトナ社会に入ったとき、就労や友人関係、結婚生活などにおいて困難に見舞われる。

南相馬市で若者の自殺率が高いことは、子どもころに震災を体験した若者たちが、オトナ社会に入って生きることの困難に直面しているのかもしれない。

いずれにしても、**福島で10年後、20年後に、子どもころに不登校や児童虐待を経験した者たちが、自殺やうつ病、アルコール依存症やPTSD、ひきこもりや適応障害の増加となって現れるのではないかと考えられる。**

それは内国植民地としてスタートした近代東北の歴史的トラウマが、住民の健康を破壊することに他ならない。

蟻塚 亮二（ありつか りょうじ）

（精神科医、医療法人社団メンタルクリニックなごみ理事長）